

ラジオ放送
〈平成28年1月～3月放送分〉

ON AIR



金光教の声

No.414

もくじ ~ contents

<先生のおはなし>

☞ 金光教の先生のお話です。

- 年頭放送「ありがたい」と思える心を育てる
金光教教務総長 岡成敏正 *page 1*
- 雨の日の出張
福岡県・直方教会 藤本有輝 *page 5*
- 一勝二敗一引き分け
三重県・松阪新町教会 水野照雄 *page 9*
- ああ、神様！
静岡県・静岡教会 岩崎弥生 *page 14*
- 最高最大のおかげに
兵庫県・熊内教会 妹尾民子 *page 18*
- お酒はおいしく楽しく
宮崎県・西郷教会 塚本敏光 *page 22*
- ありがとう
岡山県・本部在籍 金光信子 *page 26*
- 行ってらっしゃい
山口県・仙崎教会 浜田寿恵 *page 30*
- 神様と繋がる
長野県・飯田教会 金光貴子 *page 34*
- 祈りの力
高知県・越知教会 西川英資 *page 38*
- 幸せをかみしめて
京都府・八木教会 八木道德 *page 42*
- 心配から喜びに変わる
愛知県・岩倉教会 棚橋貴代恵 *page 47*
- 当たり前にありがとう
埼玉県・春日部教会 小笠原 操 *page 51*

《年頭放送》

「『ありがたい』と

思える、心を育てる」

金光教教務総長 岡成敏正

皆様、新年明けましておめでとうございます。

共々に今日の命を頂いて、つつがなく新しい年を迎えられましたことを心よりお慶び申し上げます。

昨年は、戦後七十年の節を迎え、平和への祈りや決意を新たにさせられました。社会に目を向けてみますと、宗教や文化の違い、また、国家間の経済格差や人種差別などによる紛争やテロが世界各地で頻発し、国内でも、人命を軽視した事件が続いております。まことにつらく悲

しい現実であり、その背景には、様々な事情や問題があるのだろうと思われれます。

そうした現実に出遭わされるにつけ、思い起こされるのは、かつてアメリカのシカゴ大学教授、ピアス・ビーバー博士が、金光教本部を訪問された時のことです。

ビーバー博士は、当時の教主金光攝胤せつたぬ様に、「日本の人々だけでなく、世界中の人々に対して、何かメッセージがありましたらお聞かせ下さい」と言われました。

つまり、現在、世界情勢が不安定である。戦争が起きてはならぬが、どうしたらよいか。また、世界の人々の生活に不平等があり、人種差別もあって、大きな問題になっている。そういう問題について何かメッセージがあれば聞かせ

てもらいたいと言われたのであります。

それに対して金光攝胤様は、「いろいろ願いがありますから、そのご都合を頂かれますようお願い致しております」と答えられたということとであります。

金光教には、教祖様以来、「世間になんぼうも難儀な氏子あり、取次ぎ助けてやってくれ」との神様のみ心を受けて始められた取次があります。それは、いろいろな人、どんな願いでも、「難儀な氏子」の悩みや生活上の問題を、しっかりと聞き受けて神様にお届けし、その立ち行きを祈ることとあります。金光攝胤様は、ありのままに、日頃お祈りになっているところを、そのままにお話になられたのだと思われま

す。それについて、宗教学者の荒木美智雄先生は、

「金光攝胤様の願いの中身は、はるかに日本の各宗教を超え、全ての宗教の、そしてありとあらゆる人の願いに開かれている。『開かれている』というのは、全ての人、どんな願いでも受け入れるということ、そこには、対立も、対抗も生まれようがなく、生まれるのは、『いろいろと願いがありますから、ご都合、お練り合わせを頂かれますよう、お願いしております』という祈りであり、その祈りには『全ての枠を越え行く大きさ』がある」と指摘されております。

私は、この指摘を通して、そのような深い祈りに包まれている自分であることに改めて気付かせられ、その尊さ、ありがたさを思わせられたのであります。

さらに、金光攝胤様のみ後を受けられた前教主金光鑑太郎様は、

「世話になるすべてに礼をいふころ」

人が助かり立ちゆくころ」

というお歌をそれぞれ詠んでおられます。

そして、この「世話になるすべてに礼をいふころ」について、金光鑑太郎様は、次のようなお話をなさっております。

人間は、「今日までの歴史の中で、誰一人として、自分で生んでくれと言って生まれてきた人はいない。天地のお働き、恵みの中に、命の働きが、ずっとおかげを頂いてきて、生まれた所や時やいろんなことはそれぞれに違いはあつ

ても、親の子として、恵みの中にお世話になって、命を頂いて生まれてきたということは皆同じであり、それが人間の出發であると思われ、そのお互いが、恵みの中にお世話になって生まれてきたことにお礼を申すことは、人間として当たり前のことではないか」と。

また、誰もが歩む喜怒哀楽の人生について、「天地の恵みの中に生まれてきた命が、たとえば、『目が覚めることが出来た、食事を頂くことが出来た、歩くことが出来た』というように、皆『出来た』ということで成り立っている。人は『した』と言うけれども、おかげで、お世話になって、することが出来たということをして、『した』と表現しているだけで、中身は、そういうことであり、そのことにもお礼を申しながら人

生を歩んでいくことが大切である、と。

さらには、人間は、お世話になることに慣れると、お礼を言うことを怠りがちになる。お世話になってありがたいという生き方にならずに、当たり前前のこととして過ごしていく生き方になりやすい、ともお話になっております。

つまり、私たち一人ひとは、天地のお働きの中に、尊い命を頂いて生まれ、恵みの中に生かされて生きているお互いであります。そのお互いがお世話になり合って生活させて頂いているということに気付かせられますと、「ありがたい」と思う心が生まれてまいります。お礼を土台とした生活が始まれば、神様がお喜び下さり、「人が助かり立ち行く」道が開かれてくる。しかも、それがそのまま「平和を生み出すこ

ろ」になると、お示し下さっているのであります。

新しい年を迎えるに当たり、皆様にもお世話になって「ありがたい」と思える心を大切に、一日一日をお過ごしになり、ここからの一年が喜びに満ちあふれた素晴らしい年でありますよう、心よりお祈り申し上げます。



《先生のおはなし》

「雨の日の出張」

福岡県・直方教会 藤本有輝

おはようございます。藤本有輝と申します。

先日のことなのですが、職場の上司からこんな話を聞きました。

「君たちは天気が晴れだったら良い天気、雨が降ったら悪い天気って言うだろう。でも、水がなくては一日も生きてはいけないし、雨が降らなかつたら大変なことになるんだぞ。晴れようが雨が降ろうが、それは神様のお恵みなんだ。天気に良い悪いはないと思う。どんな天気でも良いお天気なんだ」。このようなお話でした。私はその話を聞いて確かにそうだなと思いが

ら、半年前のことを思い出ししていました。

その日は朝から雨でした。仕事で、私が住んでいる福岡から長崎への出張となり、片道二百キロの運転です。「長崎は今日も雨か、雨の日の運転はいつもより疲れるなあ」と独り言を言っても、朝の慌ただしい時間帯、家族は誰も相手をしてくれません。

朝食後、出発まで時間があつたのでくつろいでいると、中学三年生の娘が焦っている様子です。いつもは自転車で学校まで通っているのですが、雨の日は歩いて行かなくてはなりません。でも、出遅れたみたいです。

私は、「送っていきうか」と声を掛けました。娘はうれしそうに、「うん、ありがとう」と言いました。早速、車のエンジンを掛け、娘を待

っていると、その日は月曜日だったので普段よりたくさん荷物を抱え、助手席に勢い良く乗り込んで来ました。

中学校までは車で十分も掛かりません。学校の中へは車の乗り入れが出来ないので、近くのコンビニに停めます。娘は、「お父さん、ありがとう。行ってきます！」と元気に出て行きました。

「行ってらっしゃい」と後ろ姿を見送っていると、娘は傘を差していますが荷物が多いせいか、背中に傘が掛かっています。窓を開けて、「背中濡れてるよ」と声を掛けましたが、雨音のせいか聞こえていません。そこで私はドアを開け、身を乗り出して、もう一度、「背中が濡れてるよ！」と大声で叫びました。しかし、声

は届かなかったみたいで、全く振り向きもせずに行ってしまった。

「仕方がない」と思い直してドアを閉め、「さあ、長崎へ出発だ」と気持ちを切り替えて、いったん自宅に戻りました。エンジンを止め、カバンを持って降りようとしたところ、どこを探してもありません。「そうだ、カバンは娘の荷物がいっぱいだったので運転席とドアの間に置いたんだ。あ、娘に声を掛ける時、ドアから落ちたんだ」と気付きました。

頭の中は真っ白になり、自分の顔が青ざめていくのが分かります。こういう時こそ冷静にと思ひ直し、カバンの中身を頭に浮かべます。カバンの中には財布、大切なカード類、そして携帯電話も入っていました。「あゝどうしよう、

出張どころではないぞ」。

私は妻に事情を話し、くじけそうな気持ちを奮い立たせ、急いでコンビニへ向かいました。

「焦るな、きつと大丈夫だ」と自分に言い聞かせますが、ハンドルを握る手は震えてきます。急いでいる時に限って信号機は赤です。前を走る車がとても遅く感じます。

いよいよコンビニの駐車場が見えてきた時、首をグーンと伸ばして身を乗り出し現場を見ました。すると、ずぶ濡れですが確かに私のカバンがあるではありませんか。「あーよかった！ あったあった！」と心の中で叫びました。

急いで車を止め、カバンを拾い上げました。そして中身の確認です。ドキドキしながらファスナーを開けると、財布がありました。お金も

入ってます。カード類もあります。しかし、携帯電話がありません。どこを探してもありません。仕方がないと諦めて自宅に戻ったところ、妻が心配して外で待つてくれていました。

私はカバンはあったけど携帯電話だけ無いことを妻に伝えました。もうあまり時間がありません。携帯電話をなくした時、どうすればいいのか、部屋のパソコンを使ってインターネットで調べることになりました。パソコンにスイッチを入れ、立ち上がりを待っていると、横のほうでピカピカ光るものがあります。

「あっ、私の携帯電話だ、ここに置いたまま行ったんだ。あー良かった」。急いで妻のところへ行き、携帯電話があった旨を伝えると、妻は、「良かったね」と安心した様子でした。

そして無事、長崎へ向けて出発しました。

私は運転しながら、先ほどの出来事を思い返していました。困っている娘のために学校まで車で送って行き、雨で濡れているのが可哀想だと声を掛けたのにカバンを落とすとは、この出張、雨も降っているし幸先悪いぞ。

：でも、ちよつと待てよ、カバンはあったではないか。携帯電話もただの勘違いだった。全て神様が見守ってくれていたように思えてきて、先程までの動揺していた心がスーッと落ち着いていきました。

「そういうえば携帯電話がピカピカ光っていたんだ」と思い出し、車を道路脇に止め、確認してみると、十件近くの着信履歴が残っていました。全て妻からです。落としたのを心配し

て、何度も電話をしてくれていました。

私はすぐに妻に電話を掛けて、「先程はありがとうね。ろくにお礼も言わずに出てしまった。ありがとう」と言うと、妻は、「うん、気を付けて行ってね」と言ってくれました。

私は、「今回の出張は幸先良いぞ。雨の長崎、頑張つて来るぞ」と晴れやかな気持ちで先を急いだのでした。



《先生のおはなし》

「一勝二敗一引き分け」

三重県・松阪新町教会 水野照雄

私の奉仕している金光教の教会にお参りして
くる小学生の少年がいます。名前はユウキ君。
いつも、お母さんとお祖母ちゃんに連れられて
お参りしてきます。



ある年の春休みのこと、四月に入ったころで
した。いつものようにお参りしてきたユウキ君
が、今日はお母さんとお祖母ちゃんより前に座
って、神様に向かって何やら真剣にお祈りをし
ています。

「金光さま…。神さま…。お願いします」

そして、私のところに一人でやってきました。

「今度、五年生になります」と、ユウキ君。

ああそうか。もう、そんなに大きくなったんだ
な、と思って聞いていると、「同じクラスで仲
良しだったタケシ君とケンタ君と、五年生にな
っても一緒のクラスになりますように。それか
ら、また一組になれますように」との願い事
です。

「五年一組になりたいの？」と尋ねると、「う

ん。まえ、小学校に入る時に一年一組になれま
すように、つてお願いしたら一組になれて、そ
れから二年生も三年生も四年生もずっと一組だ
ったから」。

…そう。確かに、そんなことがありました。
なぜ一組か、その理由は分からないままでした
が、願いどおり一組になれたのでした。

「それから、ソフトボールのピッチャーのコ
ントロールが良くなって、試合に勝てますよう
に」

「そうか。ソフトも頑張ってるもんね。よし、
神様にお願いしようね。練習もしっかりね」

そんな会話がありました。

それからしばらくして、始業式を一週間ほど
過ぎたころ、またお参りしてきました。今度も、

お母さんとお祖母ちゃんの前に座って、お祈り
をしています。そして、「先生、ありがとう」。
元気な声です。

「五年一組になれなくて、仲良しのタケシ君
とは一緒になれなかったけど、ケンタ君とは同
じクラスになれて、五年二組になりました。ソ
フトボールの試合、これまで一ペンも勝ったこ
とのない強いチームで、勝てなかったけど、引
き分けになりました」。

こんなふうに、話してくれました。本当に喜
んでいるのが伝わってくる、こちらまでうれし
くなるような声でした。

「良かったね。神様に、ありがとうって言お
うね」

「はい」とニコニコ顔で返事をして帰ってい

こうとしたのですが、振り返り、もう一度戻ってきて、「生徒会の役員にも選ばれて、ありがとう」と、ユウキ君。

あら、そんなタイプだったっけ。どっちかというと、ちよっとお調子者と思っっていたけど。

聞けば、自分で立候補したのだそう。

そうかそうか、良かったな。うれしそうだったな。と思いつつ、よくよく考えてみると、4月の初めをお願いしていたこと、全部が願い通りになった訳ではないのです。

まず、一組になりたかった、けど、なれなかった。それから、仲良し二人と同じクラスになりたかったけど、一人とは一緒になれなかった。そして、ソフトボールの試合は、負けなかったけど、引き分け。

四月の初めの四つの願い事の内、願い通りになったのは、実は一つ。ケンタ君と一緒にクラスになれたこと、だけ。言ってみれば、一勝二敗、一引き分けなのです。でも、ユウキ君はニコニコ、喜んでいました。

自分だったらどうだろうか。そんなことを考えました。四つの願い事の内、一つしか叶わなかったじゃないか。こんなふうに文句を言っているかもしれない。

子どもだから物事がよく分かっているのか、なんてことでは決まらないと思います。子どもであればなおのこと、クラス替えなんて世界がひっくり返るくらいの大事件のほず。ソフトボールの試合だって一大イベントです。

そこを、ユウキ君は、タケシ君と一緒にクラ

スになれなかったこと、一組になれなかったこと、ソフトの試合に勝てなかったこと、そんなことを不満に思うのではなくて、ケンタ君と一緒になれたこと、ソフトに負けなかったことを喜んでいいるのです。

そんな一勝二敗一引き分けを心から喜んでいいるユウキ君は、エライ。きつと神様も喜んでおられるよ、と、今度お参りしてきたら伝えてあげようなどと考えていて、ふと思いました。

生徒会の役員に選ばれたのって、そのご褒美と、それと、ここからの励ましのためだったのかな。神様が、そんなふうにして下さったのかもしれない。

それから一年あまり。ユウキ君六年生の夏休み。ソフトボール、小学校最後の試合がありま

した。

ここまでもいろんなことがありました。エースで四番に選ばれて、結構いい線いっていたのに、ここ一番の大事な試合でまさかの大乱調とか、ピッチャー返しをまともに食らって救急車とか。こちらも一喜一憂、時には肝を冷やしたり。

そして、その最後の試合の後。また、うれしそうに報告にやってきました。心なしか随分しっかりとったような印象を受けます。

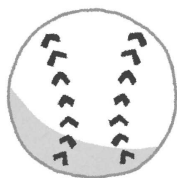
「試合、勝ちました。ピッチングもううまくきました。そしたら、バッティングのほうも調子に乗って、いっぱい打てました」

体力・技術の向上はもちろん、メンタル面の成長がみられる、とかなんとか、評論家なら言

うところかもしれません。

何かある度に神様をお願いして、うまくいった時も、うまくいかなかった時も、神様と一緒に、出来たことを喜んでユウキ君はここまで歩んできました。その結果が、この最後の勝利を呼び込んだのだと、私には思えたのです。

喜ぶ力は、やっぱり偉大だ。



《先生のおはなし》

「ああ、神様！」

静岡県・静岡教会 岩崎弥生

その日私は、金光教の集会でお話をする
になり、新幹線と在来線を乗り継いで、会場に
向かいました。自宅から会場まで約二時間。お
話をするということに慣れていない上に、初め
て行く土地なので、緊張しながら出掛けて行き
ました。

会場にはすでに大勢の人が集まり、「この人
が今日の講師なのかしら」という視線に私はさ
らされながら、用意された席に付くと、さらに
緊張感が増してくるのでした。

「はあ：神様！」

いよいよ私の番です。「皆さん、こんにちは」

と笑顔で語りかけると、会場の皆さんの目が、
一斉に私を見ます。この瞬間から、なぜか私の
スイッチが入り、緊張は吹き飛びました。せっ
かく時間を作り、お話を聞きに来て下さった方
々に、何かお土産を持って帰ってもらわなけれ
ばと、気合いが入るのでした。

約三十分間、お話をさせて頂きました。ほと
んどの方が、目をそらさずに、大きくうなずき
ながら、時には、メモを取りながら話を聞いて
下さいました。

話を終え、「共感出来た」とか、「色々考え
させられた」という声を聞き、私自身、このお
話をして良かったと胸をなで下ろしました。

ずっと準備をしてきたことが終わり、聞かれ

た方々の反応も良く、私の気分は、満足感と解放感でいっぱいでした。

その後、私は、今日の集会を主催された関係者と会食をしました。一つのことをやり終えた解放感と、充実感でお酒も進みます。お料理もおいしく、皆さんに褒めて頂き、楽しい会話と共に和やかな時間を過ごしました。

帰りの時間になりました。在来線に乗り、もと来た道のりを、行きの緊張していた気持ちとは全く違う、力が抜けた感じでガタゴト電車に揺られていました。知らぬ間に眠ってしまい、ふと気が付くと乗り換える駅です。

急いでホームに降り立ちました。そこから、新幹線の改札口に向かい、往復で買った乗車券を出そうとしたら、無いのです。「切符が無

い！！」。

バッグの中、上着のポケット、頂き物の紙袋の中、どこを探しても見付からないのです。先ほどのほろ酔いも、充実感も、安堵感あんども、一遍にみんな吹き飛んでいきました。在来線で落としたのか、それとも…色々考えても今となっては後の祭りです。さっきまで、いい気になっていた自分が恨めしく、心の中で何度も自分の頭を叩きました。

でも、そんなことをしていても、帰りの新幹線の時刻は迫っているし、どうにかして帰る手立てを考えなければなりません。駅員さんに事情を話すと、もう一度、乗車券を買い直すしかない、無情にも言われます。

ただ、切符が出てきた場合、二二〇円を支払

えば、乗車券代は戻ってくるというのです。落ち込む一方の私は、切符が出てくるなんて考えられません。もう一度、帰りの乗車券を買い直し、とりあえず予定の新幹線に乗り込みました。

帰りの車中、私は、落ち着いて今日一日のことを振り返りました。朝、私は、帰りに慌てることのないように乗車券を往復で買いました。乗車する時にはあったのだから、やっぱり在来線で落としたとしか考えられません。あの時眠ってしまったから…それにしても私って、なぜ自分のしてきたことを最後の最後に台なしにしてしまうんだろう。

「ああ、神様…」

家に着いてから、私は、夫の顔をまともに見られません。どうしても切符を無くしたことが

夫に言えないのです。お金を損してしまったことは、申し訳ないのですが、自分が情けないと思っているところに、さらに叱られたくない気持ちで言えなかったのです。

次の日、目が覚めても状況は変わりません。が、朝になつてからは、私の「やらせてほしい」という神様の御用を優先して、いろいろ協力してくれる夫の思いも台無しにしてしまったように、本当に申し訳なく、情けなく、また、言えずにごまかしていることが、後ろめたく思いました。

「昨日の話。どうだった？ 喜んでもらえたか？」。優しい夫の聞き方に、心が揺さぶられ、

「もう、今言うしかない」と覚悟を決めました。夫としてではなく、教会長として話を聞いて貰

おうと思い、ご神前で私は一部始終を話しました。

改めて振り返れば、なんだ切符を無くしただけのことと思えばそれまでですが、私には、何か大事なことを神様が私に気付かせ、私の生き方の改まりを促されているように思いました。すぐにいい気になり、神様のお嫌いな慢心になる私。結果、台無しにしてしまう私。私の昨日のお話も皆さんは喜んで下さったけれど、神様には、はねつけられたのかもしれないように思えてきました。

電話が鳴ったのはその時です。昨日の私のお話が良かったので、冊子に載せたいがどうか、という問い合わせでした。何というタイミング。もし、私があのままごまかしていたら、どうだ

ったのだろうか？ 失敗はごまかせても、自分の心の癖はごまかせない。そこに気が付いた時、神様は応えて下さったようにも思いました。あまりにももったいなく、神様に御礼申し上げました。これほどまで神様に許して頂いている私、慢心してしまう自分であることを忘れてはならないと思いました。

そして、その日の午後、駅員さんから連絡があり、あの切符が届けられたということでした。「ああ、神様！」



《先生のおはなし》

「最高最大のおかげに」

兵庫県・熊内教会 妹尾民子

平成十五年九月、当時三十三歳の息子が、「胃の調子が悪い」と言って近くのお医者さんの診察を受けました。数日後、医院から総合病院を紹介されたので、私も一緒に病院へ行きました。診察して下さった先生から、「胃潰瘍かいようが大きくなっているので、手術した方がいいですね」と言われました。しかし、それは息子の前だけであって、私にはスキルス性の胃がんであると告げられました。診察を終え、病院から出て行く息子の後ろ姿を見て、「なぜこの子が…」と、何とも言いようのない思いでいっぱいでした。

息子のことを考えると、ふびんでいとおしくてたまらない。何とかしてやりたい。代われるものなら代わってやりたい。いくら思っても仕方がないことですが、これが親の心情でしょう。それでも現実を受け止め、全てを神様にお任せしていこうと決心しました。

翌月、息子は六時間に及ぶ手術を受けました。術後、先生から、「胃と脾臓ひぞうを全部切ったが、リンパ節の所が少し取り切れてない。腹水を検査します」と説明がありました。

後日、検査した結果、末期がんで余命半年と宣告されたのです。私はショックで、その夜は一睡も出来ませんでした。やるせない思いを神様に向けずにはおれませんでした。「神様、順番が違います！ これもおかげなんですか？

私にはこれ以上の悲しみはありません。それで

も神様が、『これがおかげじゃ』と仰せなら、何にも代えられない最高最大のおかげにして下さい」と、必死にご祈念しました。すると、不思議な程、心が落ち着き、それ以後は、「今日の命をありがとうございます。後々のこと、よろしく願います」と願いました。

余命半年と言われた息子は次第に元気になり、五カ月を過ぎたころには、本人も社会復帰を考える程になりました。しかし、やがて食欲が無くなり、高熱が出て、再び入院することになりました。

「来るべき時が来たのか」。私は覚悟しました。熱は一週間経っても下がらず、焦る心を神様に預けて、状況が動くのをひたすら待ち続

けました。

そうして二週間が経ったころ、やっと発熱の原因が分かりました。なんと、息子は結核に罹っていたのです。私はがくぜんとして、「神様！どこまで私たちを苦しめるのですか」。心の中で泣きながら、「これも神様のご都合なんですよね」と、問い掛けずにはいられませんでした。

結核は伝染病なので、遠方の専門病院に転院しました。その病室で、「こんなに遠い所まで来て、もう俺は嫌や」。辛抱強い息子が初めて弱音を吐きました。ベットの上で肩を落とし、うつむいていた息子の頭を私は思わず抱き締め、「そうやねえ」と言った後、言葉が続きませんでした。息子の気持ち痛みほど分かり

ながら、何もしてやることが出来ません。しばらく抱き締め、ようやく、「心配せんでいいよ。神様は、必ず家に連れて帰って下さるから」。そう言うのが精いっぱいでした。

主治医の先生からは、「この病状では六カ月以上掛かります。体力が持つかどうか分からないが、最善を尽くします」と説明を受けました。

転院から三日目に熱が下がり始め、驚異的な回復を見せ、三カ月余りで退院出来ました。家に帰る車の中で息子は、「今日退院出来たのは、みんなのおかげやなあ。母さん、ありがとう」と涙を流していました。その言葉に張り詰めていた私の心が和みました。

しかし、その時息子の体の中は、リンパ節のガンがすでに大きくなっていました。しばらく

家で療養していましたが、少しずつ病状は悪くなり、平成十七年一月二十四日、三十四歳で安らかに神様の元へ逝きました。

金光教には、「神は、人間を救い助けてやろうと思っておられ、このほかには何もありません。信心しているがよい。みな末のおかげになる」という教えがあり、神様は、いつも私たちが幸せになれるよう願っておられ、特に難儀に悩み苦しんでいれば、すぐ側に寄り添って助かりへと導いて下さるのです。また、私たちが神様に心を向け、おすがりすることを待っておられるのです。

私は息子の闘病中、自分のありのままを出して、ひたすら神様に願います。ありがとうございました。

神様は息子の限られた命をずっと抱えて一緒に苦しみながら、その時々になくはならない方々や、数々の物をもお差し向け下さって、私たちはお世話になり、共に乗り越えることが出来ました。息子はそれを実感したからこそ、涙しながら、「みんなのおかげやな。母さん、ありがとう」と、あの言葉を残してくれたように思うのです。

人の命の長い短い、私たちの考えでは到底及ばない神様の深いお考えと大きな意味があり、息子はまさしく神様の思し召しを受けて旅立ちました。私は、「つらい悲しい出来事だけで終わらないように」と神様からメッセージを頂いたように思いました。

ある日、息子の知人から、「彼の真つすぐな

心に何度も救われました」と聞かされ、私の知らない息子の一面に、驚きとうれしさで元氣になり、息子の生きてきた証を大切にしていこうと決心したのです。

御みたま霊になった息子に、「あなたの親にならせてもらってありがとう」。私の素直な心です。毎朝、「側にいてくれてありがとう。今日も見守ってね」と話し掛けて、私の一日が始まります。

ありがとう

《先生のおはなし》

「お酒はおいしく楽しく」

宮崎県・西郷教会 塚本敏光

母は今年八十七歳。七年ほど前から認知症が出始めました。進行はゆるやかですが、最近では、聞いたこと言ったことをすぐに忘れてしまうようになってきました。何度も何度も同じことを聞き返します。それで私も何度も何度も答えませんが、一日中一緒にいると、さすがに、「それはさっき言ったでしょう。それは今聞いたでしょう」と言ってしまう。母に悪気がないのはよく分かっているのですが、繰り返し繰り返し同じことを聞かれますと、さすがにうんざりした気分になります。

そして、母は甘い物が大好きで、台所にお菓子やミカンなどがあると、それを自分の部屋へ持って行って食べるのですが、ついさっき食べたことをすぐ忘れるので、ほうっておくと何回もそれを繰り返し返してしまい、食べ過ぎで気分が悪くなったりします。ある時、家内が母の部屋を掃除していると、ゴミ箱がミカンの皮でいっぱいになっているのを見つけてびっくりしたり、またある時は、ふたを開けたばかりのイチゴジャムの瓶が瞬く間に空になっているというようなこともありました。だから、出来るだけ母の目に止まる所に甘い物を置かないように気を付けていますし、そうならないように母に注意もするわけです。

そんなことを繰り返し返す日々の中で、五年前に

亡くなった父が生前よく話していたことを思い出しました。

父は、昭和二十一年の夏、自分の蓄のう症の回復を願って、初めて金光教の教会にお参りしました。教会の先生から、「人は決して自分の力だけで生きていくのではない、止むことのない天地の働きの中で、我々は命を与えられている」と教えられ、肩で風を切るように生きてきた父のそれまでの人生も、実は神様のおかげで生かされて生きてきたのであるということを知らせてもらいました。父はそれから熱心に教会へお参りを始め、病氣全快というおかげを頂いて信心の素晴らしさを実感していきました。

ありがたい思いでいっぱいのお父でしたが、そのころの父にはもう一つの悩みがありました。

それは父のお父さんが大のお酒好きだったということでした。お父さんは毎日のように夕方になると飲みに出掛けて行きます。飲んでいない時は神様のような良い人なのに、飲むと酒癖が悪く、その帰りに誰彼なしに家に連れて来て、その人を相手に飲みます。そんなことが度重なり、やはり家族も嫌になり、お父さんが飲んで帰ってくると家の中が暗くなっていました。

ある日、父は、そのお父さんのことを神様にお願いしようと思ったのです。教会にお参りして、先生に、「実はこうこうで親父がたいへん酒好きで困りますから、どうか酒を早くピシャツと止めてもらいうように神様をお願いして下さい」と話しました。

すると先生はニコニコと笑ってこう仰ったの

です。「親としての恩のある人が好きなものを飲まれているのに、それを止めて下さいとはお願い出来ません。それよりも、お父さんがおいしく楽しく飲んでもらうように、体を壊されんように楽しく飲んでもらえるようにお願いしましょう」。

父はそれを聞いてびっくりしました。「このうえ親父が楽しく飲んでもらったかどうか。もう、いよいよ飲み倒して家の財産も何も無くなりそうなのに、とてもそんなお願いは出来ないな」と、最初は思いました。

しかし、父は家に帰って、その教えをじっくりとかみしめました。そうしてお父さんに楽しく飲んでもらうためにはどうしたらいいのかを、自分が中心になって考えてみようと思ひ直

したのです。

それから、お神酒を買ってきて神様にお供えし、「どうか親父が悪酔いをせず、飲んでも楽しくなつてもらえますように」と祈りながら、お父さんの徳利にそのお供えしたお神酒を少しずつ入れるようにしたのです。

そのお神酒をお父さんが飲むようになって、お酒の量は次第に減つていきました。ある時は、お酒で命を落としそうになるところを九死に一生を得るような出来事もありました。その時には、お父さんから、「これはお前が信心してくれたおかげじゃ」と喜ばれ、まさに楽しくお酒を飲めるようになっていったのでした。

このことを通して、父は、自分の助かりを願うだけの信心から、たとえ親子とはいえ、自分

以外の人の助かりをも願う信心へと進ませて頂いたのです。

私はこの父の話を思い出しながら、先生が言われたこの教えをもとに母のことを考えてみた時、母が甘い物を好きということを止めるわけにはいかない。それよりも、母が甘い物を食べても、おいしく楽しく食べてもらえるように、健康に差し支えなく食べてもらえるように神様をお願いさせて頂くということが大事だと気付かせてもらいました。

かつて父が頂いたこの教えを、今度は私が頂き、母のことを願っていききたいと思います。金光教には「信心は親に孝行するも同じこと」との教えがあります。親から受けた恩は計り知れません。その親が喜ぶように努めることが、信

心の大切な中味であり、同時に神様の願いでもあるのだと思います。



《先生のおはなし》

「ありがとう」

岡山県・本部在籍 金光信子

結婚して九年、私たち夫婦には八歳の長男、五歳の長女、四歳の次女の三人の子どもがいます。子どもたちは最近、可愛さや知恵の発達と共に、言うことを聞かないことが目立って多くなりました。

特に、なかなか宿題をしない、言っても聞かない長男にイライラすることが多くなってきました。時には、きつい言葉で叱ることも少なくなありません。もちろん、掛け替えのない可愛い長男であるけれど、やるべきことをなかなかやらない長男の姿勢に、イライラを抑えられず、

頭ごなしに叱ってしまう自分へ嫌気が差しつつも、同じような毎日を過ごしてしまうのです。

先日、風邪気味の長男にはおばあさんと留守番をしてもらい、家族で買い物に出掛けました。

一時間ほどで帰る予定だったのですが、二時間掛かってしまいました。私は、予定外に時間が掛かったけれど、長男はきつと好きなテレビを気兼ねなく楽しんでいるだろうと想像していました。

しかし、家に帰ると長男が、「もう、心配したよ！ 事故に遭ったかと思っただよ。ほんと、事故に遭ったかと思っただよ」と、ほっとするようにならぬ言い、素直な気持ちを伝えてくれました。普段は生意気な長男も、私たちを心配してくれる優しい気持ちを持って育ってくれている

ことを感じ、とてもうれしくありがたい気持ちになりました。

また、他の日には、約束を何度も破る長男を夫が注意しようとした時、二人の妹たちが幼いながらも、お兄ちゃんを守ろうとするのです。

そんな二人の姿を見た時に、「ああ、神心を頂いているんだなあ」と痛感しました。神心とは、相手を思つて「可哀想」「可愛い」と思う気持ちです。私たちは、可哀想な人を見て、「可哀想と思いなさい」、可愛いものを見て、「可愛いと思いなさい」とは教わりません。でも、言葉の違いや国境を超えて、生まれながらに、可哀想と思う心、可愛いと思う心を神様から与えられているのです。子どもたちには、その心がしっかりと備わり、「相手を心配し、思いやる」

という行動に現れたのだと思いました。

そこで、ふと気付かせてもらったのは、言うことを聞かない長男に、ついついイライラしてしまう私なのですが、神様をご覧になるとどうなのかなあ、ということでした。

金光教では、「人間は皆、神様のいとしい子ども」と言われています。神様は、常に人間を可愛いと思つておられるのです。

夜、子どもたちの寝顔をのぞくと、とてもキレイな顔をしています。美人とか、ハンサムという意味ではなく、産毛、まつ毛、鼻の穴、唇…細部まで丁寧に作られていることを実感します。起きている間はイライラすることもありません。叱ることもあります。でも、その寝顔を見て、その寝息に触れると、本当にいとおしく、大き

な命を感じます。これが、神様が人間を思っ
て下さる思いと同じであると言われたら、素直に
そう受け止めることが出来ます。そして、昼間
叱ったことをゴメンネと後悔します。子どもを
持たせて頂いて、本当にいろんなことに気付か
せて頂きます。

私も同じ目線子どもに向けなければいけな
いと思いつつも、ついつい自分の思い通りに
ならないことが起きてくると、そのことにとら
われてイライラしてしまいます。しかし、一番
大事なのは、自分の思う通りに物事が進むこと
ではなく、今、自分を含め大事な人の命が、生
きて働いていることだと気付きました。

そこに気付いた時、私のイライラのあり方も
変わっていききました。長男がやるべきことをや

らなければ当然注意して諭しますが、その前に、
「今日も元気で居てくれてありがとう」「大好
きだからね！」と、気持ちを伝えるようにして
います。

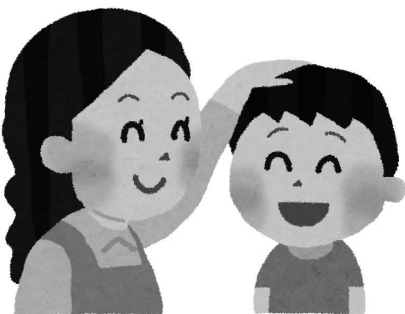
以前、幼稚園で一人百円分の買い物出来る
リサイクルバザーがありました。長男は、自分
の欲しいものを選んですぐにレジに行くと思っ
て、商品や、商品の並ぶ棚をグルグル回り、よく品
定めをしていました。そして、「これは妹の分、
これはお母さんの分」と、家族にそれぞれ選ん
でくれたのです。私は、子どもが小さいうちは
親が子どもにしっかりと愛情を注いで育ててあげ
なければいけないと、言うなれば何でも一方通
りのように考えていました。しかし、子どもた
ちの、相手を思う気持ちを見せてもらったこと

で、お互いに思いを掛け合っていることに気付かされました。そして、以前お兄ちゃんからバザーでプレゼントをもらった妹たちも、今度は、「お兄ちゃんに、みんなに：」と、品物を選ぶようになりました。

日常生活の中で、私たち大人が子どもを育てるだけではなく、子どもたちも私たち大人を育ててくれます。父親として、母親として、祖父母として、兄弟として：家族全員がそれぞれお互いに育てられていることに気付かされま

す。
私は、「お母さん」と呼んでくれる子が居るから母で居られます。娘は、「お母さん、私のこと好き？」と愛情の確認をしてくれます。「だーいすき！」と答えると、うれしそうに納得しま

す。私もそうして大事な存在だということを確かめさせてもらっています。また、わがままなことを言う時は、「今はあんまり好きじゃない」なんて返すと、悲しそうな顔をして、「なくんで〜」と不満そうに言い返してきます。言葉一つで、その子が明るくなることを実感します。今日も私は、登校、登園する子どもたちの背中が見えなくなるまで、「今日も元気でありがとう！」と感謝の気持ちで手を振りたいと思います。



《先生のおはなし》

「行つてらっしゃい」

山口県・仙崎教会 浜田寿恵

「行つてきませす」

「はあい、行つてらっしゃい。気をつけてね」

毎朝、慌ただしく登校する我が家の三人の子どもたち。私は他の用事をしていても、出来るだけ元気よく声を掛け、子どもたちを送り出すようにしています。そして、「気を付けてね」と言った後に、声にこそ出ませんが、「今日もよろしくお願いします」と、神様に子どもたちの一日の無事をお願いします。

でも、それは子どもと私が機嫌よく朝のひとときを過ごせた時のことで、一週間の半分は、

「はよう起きて」「はよう行きいや」などと、けんか腰で送り出したりしています。そして、子どもたちが出掛けた後で、「しまった！ またやった。神様ごめんなさい、また怒ったまま送り出してしまいました」と神様にお詫びをするのです。

さて、私は金光教の教会で、両親や祖母の祈りの中で大きくなりました。大人になっても両親の私たちに對する祈りは少しも変わっていないと思います。

今から十五年前、私たち家族は当時住んでいた社宅を引っ越すことになりました。借家を探している最中に、母に、「いいところがなかなか見付からんのよ」と愚痴をこぼしました。すると母は、「いい所が見付かりますようにって

神様にちゃんとお願いさせてもらうから安心して探しよき」と答えてくれました。実はこの時、私は駅まで近いとか、家賃が安いとか、条件のいい所を探していると言ったつもりでした。しかし、母は純粋な気持ちで、「いい所が見付かりますように」と神様に願ってくれていたのではないのでしょうか。

その後、何とか駅に近い今の家を見付けることが出来ました。そして、引っ越していくと、近所の方たちが私たち家族を驚くほど温かく迎えて下さいました。子どもたちのこともまるで自分の孫のように可愛がって下さいます。子どもたちは山で遊ばせてもらったり、畑のそばを歩けば野菜を頂いたり、優しい言葉を掛けてもらったりと、色々な体験をしながら、のびのび

と成長しています。あの時母が神様に願ってくれたからこそ、今の生活があるのだと思います。

また、今でも実家の教会へ帰省した折、我が家へ戻る時は、父が必ず私たちの車が見えなくなるまで、ずっと手を合わせて祈るようにして見送ってくれています。移動中の無事や、今後の私たちの無事を神様にお願ひしてくれているのだと思います。

その両親に比べて、今の私は親としてどうなのでしょうか。

金光教の前の教主金光様のお歌に、

「ちちははも 子どもとともに 生れたり

そだたねばならぬ 子どもちははも」

というものがありません。

日々成長していくのは子どもたちだけではありませぬ。親自身がその子どもとの親として日々成長しなければならぬのです。

長男が小さい時にこんなことがありました。

元々よく熱を出していましたが、その時も一週間くらい三十八、三十九度の熱が続いていました。夫はいつものように残業だったので、二人で夕食を済ませ、寝かし付ける準備をしようと思っていた矢先、私が目を離した隙に、ドスンと物が倒れる音がしました。ふざけているのかと思いつつながら部屋に戻ると、子どもが硬直したまま倒れていました。

「えっ」。私の頭の中はパニックです。子どもを抱き抱えながらも何が起こったのか分かり

ませぬ。その時思わず、「金光様！」と声を出してしまいました。と同時に、頭の中に、以前お舅しゅうとさんから聞いた話が浮かんできました。

「ええか、寿恵さん。子どもが小さいうちは高い熱が出た時に、ひきつけを起こすことがある。でも、すぐ治まることが多いから慌てんでもええ」と、お舅さんの知り合いの小児科の先生の話を聞かせてもらっていたのです。「子どもがひきつけを起こしたら、お母さんはまず自分を落ち着かせることが一番じゃ。まずは子どもの様子をしっかりと見といてやれ」という内容でした。それを思い出した途端、私の頭の中はすーっと冷めていきました。とりあえず子ども様子を静かに見ようと思えたのです。

しばらくして子どもはひきつけが治まり、落

ち着くことが出来ました。私はお舅さんに話を聞かせてもらっていて良かった、それを思い出すことが出来て良かったと思いました。そして、自分がパニックになった時、無我夢中で頼ることが出来る神様に合えていて良かったと、心の底から感じました。

このように子どもを育てていると、親であってもどうにもならないことが次々と起こってきます。だからこそ神様をお願いさせてもらうことが大切だと思います。

「行ってきます」と出掛けた子どもたちに親の目は届きません。「ただいま」と無事に帰ってこられるように、神様をお願いさせてもらうばかりです。

子どもたちの年齢にふさわしい親として、私

自身が少しでも成長出来るよう、神様に心を向けて毎日を過ごしていきたいと思っています。



《先生のおはなし》

「神様と繋がる」

長野県・飯田教会 金光貴子

金光教でお祭りさせて頂いている神様を天地金乃神様と言います。この神様は、「天地の間に生きている人間は皆、神の愛し子である」と言われる神様です。私たち人間は皆、この天地金乃神様のお恵みとお働きの中に生かされて生きています。

私の奉仕する教会に、ヨシコさんという女性がお参りになっていきます。ヨシコさんがお参りするようになったのは、教会に電話をしてもらったことがきっかけでした。

「実は、最初、教会に電話した時は、とても

怖かったんです」。ヨシコさんは後になって、そんなふうに話してくれました。実際、初めての時は、「もしもし」という声を聞いたただけで電話を切ってしまったそうです。

私は、「神様があなたを助けようとして電話を繋げて下さったのですよ」とお話ししました。

最初の電話から二週間ほどして、ヨシコさんは初めて教会にお参りされました。車でも二時間以上掛かる道のりです。

ヨシコさんが悩んでおられたのは、まもなく定年を迎える仕事のこと、職場の人間関係のこと、自分の健康のこと、そういった事柄でした。

ヨシコさんは、苦しい心の内を、それこそ堰を切ったように打ち明けられました。「もう、どうしたらいいか分かりません…。死んでしま

いたいと思うくらいです」。そんなふう
に、涙ながらに、話し続けられました。

私は、「よくお参りされましたね。大変な中、毎日休まずに真面目に仕事をされていて偉いです
ね」と言わせて頂きました。すると、「私、初めて人に褒められました。仕事の話をしても愚痴ばかりだから、またそれかと言って誰も私の話を聴いてくれませんでした。私の話を聴いてくれたのは先生だけです」と言われました。こんなふうに言葉をやりとりして、気が付けば一時間以上が経っていました。

その日以降、そのつらい出来事を毎日毎日、電話とメールで伝えて来られました。

「職場の同僚にあいさつをしても自分だけ無視される」

ヨシコさんは、耐えられない苦しみや悲しみをメールに乗せて伝えてこられました。私はその都度ヨシコさんに、「大切なのは今日一日ですよ。とにかく今日一日のことを神様にお願
いし、一つひとつおすがりしながら乗り越えさせて頂きましょう。仕事中でもたまらなくなつたら、『神様、神様』と心の中で言わせて頂ければ、神様があなたに付いていて下さいますよ。私も
ご祈念させて頂きますから」と返信させて頂きました。ヨシコさんのことを神様にご祈念させて頂きました。

誰しも、つらいことや悩み事があれば、周りの人に愚痴の一つも言いたくなります。しかし、それを、神様に聴いて頂くつもりになれば随分違うと思うのです。その違いは、雑草を地面の

上から刈るか、地中にある根から引き抜くかほどの違いがあります。人に話しても、その難儀の草は根が残っているの、またすぐに生えてきてしまい、つらく苦しくなるものですが、神様に聴いて頂けば、難儀は根っこから引き抜かれ、しんどいものを引き取って下さいます。

ヨシコさんは、「神様、神様」とお願いしながら乗り越えさせて頂き、「先生、一日、一日ですよね」と言われ、頑張って仕事をされました。

三カ月ほどが経ち、そんなヨシコさんに転機が訪れます。

以前から仕事を変わりたいと思ってはいたものの、「定年前のこの歳ではどこも取ってくれませんから絶対に無理です」と諦めておられた

ヨシコさんでした。ところが、思いも寄らないところから声を掛けられ仕事が変わることになったのです。

新しい職場は、家賃も食費もいらない住み込みの仕事でした。彼女は、生活するにも精いっぱいだったため、家賃や食費、光熱費などの生活費が浮くことはとても有り難いことでした。

また、今までの介護の仕事は力仕事のため、身体的にもとてもつらく、全身が痛み、マッサージやハリ、点滴にも通っていましたが、その悩みも全くなくなり、長年の肩こりも治ったとお礼を言われました。おまけに、二十年来、悩まされていた不眠症も快方に向かっていると、このことも喜んでおられました。

決して不眠症が完全に治ったわけではありません

せん。それでも私は、「神様をお願いして休ませて頂き、例えば夜中に目が覚めても、その時間まで眠れたことを神様にお礼を申し上げていきましよう」とヨシコさんに話しました。「ありがとうございます、やってみます」と話すヨシコさんはうれしそうです。

新しい職場は定年もなく、ずっといてくれていいからと言われているそうで、彼女にとって本当に願ってもない職場に就職させて頂くことが出来ました。

今でもヨシコさんはメールで、電話で、願い事や悩みを伝えてこられます。月に一回ほどは、二時間の道のりを車でお参りにもなります。

そして、いろんな出来事の中に、良かったことを見つけては、「これは神様のおかげですね。

感謝しなければ」そんなふうには、よく言われるようになりました。

まだまだ世の中には難儀で苦しんでいる方がおられます。人間は神様のいとしい子どもであって、いつも神様にお守り頂いていると安心出来ている方は、ほんの一握りです。

これからも私は彼女を含め、たくさんの方の悩み苦しみを聴かせて頂き、その人たちの助かりを神様に願わせて頂きたいと思えます。



《先生のおはなし》

「祈りの力」

高知県・越知教会 西川英資

私は、金光教の教会で奉仕しています。数カ月前のこと、いつも参拝されるAさんから病気に
に関する報告がありました。Aさんは、「この

度、病院のエコー検査において肝臓と胆嚢たんのうに小さな影が見付かりました。より詳しく検査が必要で、がんの恐れもあるとお医者さんに言われました」と、神妙な顔付きでお話されました。

それを聞いた私は大変心配しました。「Aさんは大丈夫だろうか。もしかするとがんではないだろうか。手術で治るのだろうか。手術は難しくないだろうか」と、Aさんのことを先へ先

へ心配していました。

金光教の教会では、御祈念帳という、お参りになった方の願い事を記すものがあります。それを見て教会で奉仕する者が日々神様へお祈りをしていきます。御祈念帳は教会設立当初からの分が全て保管されていますので相当古いものであります。

六十歳のAさんは祖父母の代から信仰しますので、Aさんが生まれた時からのお願ひ事などが保管されてありました。

そのことをふと思わせられ、古いご祈念帳を引っぱり出してきて、Aさんの名前を探しました。ありました。名前の後に「無事出産」と書かれていました。願ひ主はAさんのおじいさんでした。三歳のころには、「塀に上って遊んで

いて、頭から下に落ちた後、嘔吐する。無事の祈願」とありました。その後「何事もなくありがたし」と書かれていました。それからも事あるごとに願い事が書かれていました。十五歳ころには受験です。「無事合格ありがたし」とあります。その十年後には「結婚御礼」とありました。その後にも、あちらこちらにAさんのお名前が見受けられました。

お願い事の横には必ず「御礼」とありました。金光教では問題の解決を神様へお願いする前に、これまでの感謝を唱えるからです。

しばらくの間、過去のご祈念帳を見ながらAさんのことをお祈りをしているうちに、「Aさんは、今まで様々な出来事を通りながらも神様に守られてここまで来ることが出来たのだな

あ。今回もきつと大丈夫だ」という妙に確信めいた思いになられました。それと同時に、Aさんは生まれた時からご両親や教会の先生をはじめ、周りの大勢の人たちからずっと祈られ続けて今日まで来たのだなあと、祈りのありがたさを感じ入ったことでした。

そして、Aさんと同じく私自身も両親や周りの方の祈りの中にあるのだと思うと胸の中が感謝の気持ちでいっぱいになりました。後日Aさんがお参りになり、精密検査の結果、肝臓と胆嚢の影は良性のもので何も問題はないという報告をされて、ほっと一安心致しました。

誰でも経験がおありと思いますが、例えば物でも、自分で買って手にするよりもプレゼントされる方が何倍もうれしいものです。それは、

物に込められた相手の思いを感じられるからだ
と思います。

思いは信仰によって祈りに変わります。人を
思い、その上祈ることには力があります。

先日、私は突然歯が痛くて我慢出来なくなり
ました。すぐに歯医者さんに行つて診てもらっ
たところ、歯を抜くしか方法がないと言われま
した。その日はとりあえず痛みを抑える処置を
してもらい、歯を抜く日を予約をして帰りまし
た。予約の日が近付いてくると、どんどん不安
になりました。「痛くないだろうか。問題なく
抜くことが出来るだろうか。抜いた後はどうな
るのだろうか」など、色々な思いや心配が次か
ら次へと頭の中を巡りました。

当日の朝になりました。あるご信者の方から

メールを頂きました。メールには、「先生、今
日は歯の治療ですね。歯がスムーズに抜けて無
事に治療が出来ますよう一生懸命お祈りしてい
ます」とありました。私はメールを読んだ後、
何とも心強くて、うれしい気持ちになりました。
それまであった不安な心が一気に軽くなって目
の前がぱっと明るくなりました。幸い治療は痛
みもなく無事に済みました。

私はいつも仕事柄お参りになられた方のこと
をお祈りしています。ですので「人のことを祈
る」ということは日常の中で常に意識するので
すが、「私自身が人から祈られる」ということ
にはあまり意識がいきません。

メールをもらったことで私のことを一生懸命
お祈りしてくれている人がいるということに改

めて気付かされました。

そして、実際に祈りによって心が元気づけられることを教えてもらいました。

金光教には、「**すれ違う人のことでも神に祈ってあげよ**」という教えがあります。金光教では親子、夫婦、兄弟や友人隣人や信奉者同志など、あらゆる関係において相手の幸せの祈り合いをします。それこそ文字通り、道ですれ違う人を祈ることもします。人のことを祈るうちに自分の心も安らぎ、穏やかになり、祈る喜びを感じます。

お互いが祈り祈られる関係があるところには争いも生まれにくいはずです。まずは家族の間に、そして次は隣人との間へと祈り祈られる関係が広がればいいですね。そして人の祈りと同

時に、私たちに掛けて下さっている「生きてくれよ」という神様の思いを知った時、人は底なしのうれしさを感じます。

神様は、私たちを生かそう生かそうとして下さっています。そのことは、意識しなくても呼吸が出来、心臓が鼓動することからも分かります。神様は私たちにさらに、「幸せになつてくれよ」と思っただ下さっています。その思いに込めていきたいと思えます。



《先生のおはなし》

「幸せをかみしめて」

京都府・八木教会 八木道徳

私は車である場所を通ると、必ず二年前の出
来事を思い出します。

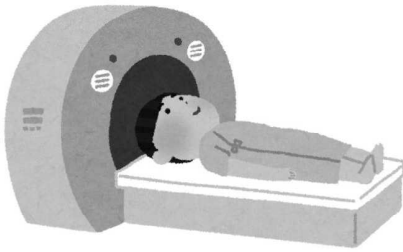
息子の^{とわ}亨が小学六年生のある日、友だちの
お父さんに連れられて泣きながら帰宅してきま
した。スケートボードに乗っていて、勢い余っ
て転倒しアスファルトで頭を強打したとのこと
でした。転倒した
時の記憶が無いよ
うで、大事をとっ
て車で送ってきて
下さったのです。



目立った外傷や出血が無かったので、しばらく
く頭を冷やして様子を見ていましたが、横にな
ると、「頭が痛い！」と泣いてしまいます。普
段の様子と違うので、近くの病院に救急外来で
の診察をお願いしましたが、脳外科の先生がお
られないので対応出来ないとのことでした。他
の病院を探している間に、子どもの顔色がどん
どん悪くなり、寒気と吐き気を訴えたので救急
車を呼びました。

救急車の到着後、救急隊員に事情を話すと、
搬送先を懸命に探して下さいましたが見付から
ず、とりあえず子どもと妻を乗せて救急車が出
発しました。出発して間もなく、搬送先の病院
が決まり、私は車で後を追いました。
搬送後、すぐにCT検査をして頂きました。

担当医から、頭がい骨骨折、硬膜外血腫であると告げられ、「出血で脳圧が上がり、頭痛、めまい、吐き気の症状が出ている」との説明を受けました。さらに、「点滴で止血剤を投与し、2時間後にもう一度CTを撮って出血が止まっていれば、入院をして経過観察をしますが、出血が止まらなければ開頭手術をします」と告げられ、事の大きさに頭が真っ白になりました。



処置室から個室へと変わり、亨はベッドの上で泣いていました。実は、指折り数えて楽しみにしていた修学旅行が十一日後に近付いていたのでした。痛みと不安で泣き続ける亨に私は、「今は泣いてもいい。でも泣き続けることはあかん。過去には戻れないから悔やんでも仕方がない。神様はけがが治るように働いて下さっているから、亨に出来ることは気持ちを落ち込ませないことや。『ありがとう』という言葉を増やして、心配な時は、『こんこうさま。こんこうさま』と心の中で唱えなさい。修学旅行に行けることを楽しみにして頑張らなあかんで…」と、子どもの気持ちを落ち込ませないために、精いっぱい言葉を掛けて励ましました。

救急車で搬送されたことを聞かれた教頭先生

と担任の先生は、夜分、遠方にもかかわらず病

院に駆けつけ、励まして下さいました。聞けば、学校でも先生方が遅くまで残って心配して下さいているとのことで、申し訳なく思うと同時に、

快復を祈って下さっていることを本当にありがたく思いました。

二時間後の検査で出血が止まっていることが確認出来た時は、安堵あんどしました。翌朝から食事を取ってもいいこと、退院には十日から二週間掛かることを告げられました。さらに、生まれつき左の脳に水の袋があり、今後、柔道・ラグビーなどの頭に衝撃を受けるスポーツはしてはいけないことが判明しました。思い掛けない形で、息子にとって大事なことを知らせて頂き、神様のお働きを感じずにはいられませんでし

た。

病院は完全看護なので付き添うことが出来ず、深夜十二時頃に病院を後にしました。その後、自宅の神前で夫婦そろってご祈念をしました。親としての不徳をお詫び申し上げ、そのような中にも多くの方々のお世話になって助けて頂いていることに、御礼を申し上げても申しきれない気持ちで神様に向かいました。

翌朝、通勤前に病院へ向かいました。搬送された病院は通勤途中にあり、行き帰りに様子を見ることが出来るので本当に助かりました。

修学旅行に行けるかどうか、ギリギリのところでしたが、本人は行けることを楽しみに、気持ちを前に向けて、「こんにちは。こんにちは。さま」と唱えて頑張っていたようです。食事を

している時や頭を動かすと痛がりましたが、「ありがとう」の言葉を大切に取組んでもいました。おかげで入院から二日後の夜には二十四時間点滴が取れ、トイレまでの歩行が許可されました。当初は歩くどふらつきがあり、心配しましたが、少しずつ改善していききました。

入院中には、校長先生や担任の先生が忙しい中にもお見舞いに来て下さいました。何より、クラスメートから、「一緒に修学旅行に行こう！」との励ましの寄せ書きをもらって、本人も元気をいっぱい頂き、皆にお礼の手紙を書くことも出来ました。

その後も順調に快復し、入院して五日目に退院させて頂くことが出来ました。また、修学旅行にも条件付きながら行っても良いとの許可を

頂き、親子だけでなく学校の先生方や保護者の皆さん、友達までも自分のことのように喜んで下さいました。

教祖様は、「神は、人間を救い助けてやろうと思っておられ、このほかには何もないのであるから、人の身の上につけて無駄事はなされない。信心しているがよい。みな末のおかげになる」とみ教え下さっています。あれから2年が過ぎ、亨は中学二年生になりました。マツト運動や柔道の授業に配慮して頂きながら、大好きな野球や勉強にと頑張っています。

通勤途中、車で病院に向かった場所を通ると、今でもあの時のことを思い出します。そして、必ず、今の幸せを当たり前にせず、神様のご恩に応える生き方が出来ているかどうか、自問自

答させられます。今日も精いっぱいご恩返しが出来るように頑張りたいと思います。



《先生のおはなし》

「心配から喜びに変わる」

愛知県・岩倉教会 柵橋貴代恵

豊子さんは、私の奉仕する教会に参拝している六十代の女性です。豊子さんのご主人は四十年前に、二歳の男の子一人を残して亡くなられました。ご主人のご葬儀の時、教会長先生は泣きじゃくる豊子さんに、「これからは神様を杖にして、ご主人の御霊様みたまにお願いしながらお子さんを育てなさいよ」と優しい言葉を掛けて慰めました。女手一つで子どもを育てるのは大変なことでしたが、その息子さんは現在四十二歳となり、母子二人で暮らしています。

その息子さんは就職して間もなく、深刻なう

つ病になりました。再発を繰り返しながらもおかげを頂いて回復し、今は再就職も出来ました。が、食事洗濯も何から何まで親任せとなりました。ほとんど部屋に引きこもり、あいさつも会話もなく、食事も別々という状態です。ですから、豊子さんは教会に参拝する度に息子さんの末の安心を願っていました。

そんなある日、豊子さんたちの自宅マンションの天井から水漏れが起きました。上の階の住人に聞いても、「うちは知りません」と全く関わってもらえなかったので、豊子さんはマンションの管理組合に連絡しました。すると保険で修理するならば、入居者一人ひとりに事情を説明して回り、全員の同意書をそろえねばならないと言われ、業者も豊子さんが探さねばなり

ませんでした。豊子さんは心身共に疲れ果て、こんなことはもうゴメンだと思ったその時に、ふと新築マンションの広告が目に残り、早速にマンション購入の仮契約をしてしまいました。ところが時間が経つにつれて、「今のマンションが売れなかつたら、新居の支払いはどうなるのだろうか？ 生活は出来るだろうか？」と気になり始め、夜も眠れなくなっていました。食欲もなくなり、日に日に痩せていくので病院へ行くと、うつ病だと言われました。起きることも寝ることもつらく、人と会うと思っただけで動悸がします。それで豊子さんは教会に参拝し、病気の回復と、新居が無事に購入出来るよう神様に願いました。

私は豊子さんに向かって、「何もかも自分の

力でしようとして、心配を抱え込んで病気にま
でなってしまうのです。これからは、一つひ
とつ神様にお願ひして事を進めましょう。『大
変な目をしたから早く引越したい。後に住む
人のことは知らない』という心では、神様は喜
ばれません。これまで住まわせて頂いた感謝の
心と、後に住む人が安心して生活出来るように
祈る心で、水漏れ修理、売却、新居購入と順々
に進むように願ひしましょう」と話をし、豊子さ
んのことを祈りました。

水漏れ修理の日が来ました。豊子さんから、
「朝から動悸がしてつらいです。修理が無事に
済みますように」と電話があり、終わったら、
「修理の人が来たら不思議に動悸が収まり、神
様に守られていると感じました」と安堵あんどした声

でお礼の電話がありました。このように新居の内装、水回りなどすべて神様にお願ひし、お礼を申しながら新居購入へと手続きが進んでいきました。

豊子さんは、ここまで手続きを進めることが出来たお礼にと教会に参つてこられました。

豊子さんは目に涙を浮かべて、「うつ病になり、当たり前前に出来たことが出来なくなつて、自分の力ではなく、ずっと神様に守られていたから生活が出来てきたのだと気付きました」と言われ、さらに、「実は、私がうつであることを息子に話せません。私がうつだと知つたら、動揺して息子がまたうつになるのではないかと不安なんです」と言われました。私は、「病気に ついて話すか話さないかは神様にお任せしま

しょう。この新居の購入を通して、息子さんの生活意識が変わるようにお願ひしましょう」と話しました。

やがて、その後、晴々とした表情で豊子さんが教会に参拝されました。「息子が薬を飲む私を偶然見掛けて、『何の薬なのか?』と聞くので、恐る恐る、『水漏れの頃からうつになつてずっと調子が悪い』と話す、息子が、『僕の時より軽いから大丈夫だよ』と言つて家事を手伝うようになってくれました。日々神様にお礼を申していると、次第に薬を飲み忘れるくらい体調が良くなり、薬の服用を止めることが出来ました」と感激しながらお礼を言われました。

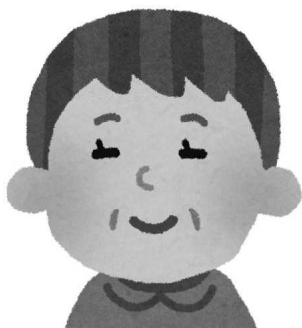
更に、一番心配していた自宅の売却も不動産の人が思う以上の額を提示してくれました。す

ぐに多数の問い合わせがあり、あつという間に売却出来、本契約も無事に済み、新居を共同名義にしたので、息子さんが生活に責任を持つようになりました。引越しの日、豊子さんは家に祭つてある神様に、親子そろつてお礼参りをし、いの一番に神様を新居にお祭りされました。

一段落して、引越しのお礼と併せて、ご主人が亡くなって四十年の御霊祭りが仕えられました。今まで給料を自分のためだけに使つていた息子さんが、お父さんのお祭りに使つて欲しいと、初めて出してくれた費用でお祭りの準備をするうちに、途絶えていた親子の会話が自然に戻り、ありがたいお祭りとなりました。

豊子さんは災難が降りかかり、難儀のただ中にあつても、神様に心を向けていきました。そ

うすること、心配していたことがすべてありがたいものになつていきました。現在は親子そろつて喜びの生活を送っています。その表情はずつと神様が見守つて下さっているという安心に満ちています。



《先生のおはなし》

「当たり前前にありがとう」

埼玉県・春日部教会 小笠原操

私は現在、埼玉県にある金光教春日部教会で奉仕しています。

私たちは生きていく上で、思い通りにならないこと、様々な問題、苦難に遭遇する場面が多々あると思います。私にもたくさんあります。

その問題だけを見ていると、「大変だ！ 大変だ！」に終始してしまいます。しかし、その問題をどう受け止め、どう消化していくかによって、そこからの生き方が大きく変わっていくように思うのです。

私が社会人として働いていたころの話です。

仕事の途中で急に息苦しくなり、翌日病院で診断してもらったところ、肺の一部が破れて空気が漏れてしまう「自然気胸」だということ、すぐ入院となりました。簡単に言えば、肺が穴の開いた風船のようにしぼんでしまう病気です。二十歳代から三十歳代の背が高く、痩せた人に多く発症するようですが、あまり原因ははっきりしないということでした。



またある時、ちよつとした不注意から足の骨にヒビが入り、数カ月の間、不自由な思いをした経験があります。ほんの小さなヒビでしたが、それでも全く歩くことが出来ない、家中を這はって移動するようなことでした。

皆さんはどうでしょうか。息が吸えて当たり前。歩いて当たり前。それまではそう思っていましたし、正直なところあまり意識して生活していなかったという方が正しいかもしれません。

しかし、そうした病気、けがを経験すると、今まで当たり前のように思われていたことが、当たり前ではなく、実は大変なことなんだと気付かされるのです。少し大げさに言ってしまうば「奇跡」とも言えるわけです。これは、病気

やけがに限ったことではありません。日常生活の中で、つい当たり前と思ってしまうことはたくさんあります。空気、水、陽ひの光など、数え切れないほどありますが、それが当たり前でなくなつた時に、初めて大切さ、ありがたさに気が付くのです。失つてその大切さが分かる。悲しいことですが、それが私たちの姿なのかもしれません。

昨年、有名ミュージシャンがミュージシャンの命でもある声を失い、その闘病手記が話題になり、私たちに感動を与えてくれたことは、まだ記憶に新しいことと思います。

世の人の誰もが順風満帆にその人生を過ごすわけではありません。それは金光教の信心をしていても同じことが言えると思います。

私の奉仕している教会に足しげくお参りになる男性の田中さんは、現在六十八歳。二人の娘もそれぞれ家庭を持ち、商売の傍ら、夫婦水入らずの時間を楽しんでいました。

ところが昨年、咽頭がんのため八時間にも及ぶ声帯摘出の大手術を受けることになりました。これまで大腸がんも経験し、数年前にも咽頭がんの放射線治療を受けたこともありましたが、放射線治療の影響で唾液が全く出ないというところもありましたが、完治して元気に日常生活を送っていました。

ところが、のどに違和感がいつまでも残っていたため、何度も専門病院で検査を受け、その都度、異常は無いという検査結果を頂いていました。

安心していた田中さんでしたが、最近になってがんが見付かったのです。ご本人は、手術は声帯の全摘出になるため、出来るだけ避けたいと思っていたようですが、医師から、「声を取るか、命を取るか」という、究極の選択を迫られ、声帯摘出の手術を受けることになったのです。術後当初は、「こんな無様な姿を見られない」と、そんな自分の姿を受け入れることが出来ませんでした。

これまで妻、子、孫たちと何不自由なく会話をすることが出来ていたのですから、まさかこんな急に声を失うことになるとは、誰もが全く想像していなかったことでしょう。その時のショックといったら、私たちには計り知ること出来ませんが、死の恐怖やこれからの生活へ

の不安で押し潰されそうになったこととかわれます。そして、「信心しているのになぜ？ どうして？」という思いも起こったかもしれませ

ん。
その後、経過は順調に進み、無事に退院され、現在は自宅療養を続けておられます。

しかし、これまで何度も病気を乗り越えてきた田中さんだからこそ、生かされていることの喜び、健康であることのすばらしさ、家族の支えがどれだけ大きなものかなど、改めて気付かれたのでした。

田中さんは、食道発声法に取り組みたいと前向きに考えるようになり、目下体調を整えているところですよ。

奥様は、「主人が何を言おうとしているのか

を口の動きを見て理解するようにしています。

その顔と顔を合わせるさまは、まるで新婚当初に戻ったようです」と話してくれました。

今、出来ることを精いっぱい取り組もうとされる田中さんの姿に、命の尊さ、力強さを感じずにはおられません。

何でも当たり前という感覚に陥ってしまうと、日常の中で感謝の気持ちが持てなくなりま

す。当たり前のことなんて一つもないんだ、ありがたいたいことなんだ、奇跡なんだと考え直し、その尊さに気付くことです。

「当たり前こそ奇跡」「当たり前前にありがとう」。そんな気持ちを持ち続けたいものです。

感謝

金光教本部 ラジオ放送係

住所 〒719-0111
岡山県浅口市金光町大谷320

電話 0865-42-6453

FAX 0865-42-2114

メール w-master@konkokyo.or.jp

KONKOKYO

ニッポン放送	日曜日	あさ4時30分
東海ラジオ放送	金曜日	あさ5時25分
朝日放送	水曜日	あさ4時50分
RKB毎日放送	日曜日	あさ6時50分

ここで聴くおはなし

検索

